2016年度
ロザリー・レナード・ミッチェル 記念奨学金募集要項

立教大学ジェンダーフォーラムは、本学女子学生寮であったミッチェル館の理念を引き継ぎ、ジェンダーについての教育・研究活動の拠点として1998年４月に誕生しました。本奨学金は、本学学部および大学院に在籍する学生で、ジェンダーに関わる活動・研究をした者（団体）、あるいは活動・研究を計画している者（団体）を幅広く対象とします。

書類提出期間：2016年 10月３日（月）～ 2016年 10月 31日（月）17：00まで
書類提出先：学生部学生厚生課奨学金係・新座キャンパス事務部学生課・独立研究科事務室
採用発表：11月 28日（月）
学生部学生厚生課奨学金掲示板、新座キャンパス奨学金掲示板、ジェンダーフォーラム掲示板（10号館通路）に掲示予定
授与式：12月上旬（予定）

（A）ジェンダーフォーラム論文賞

対象：学部学生・大学院生（個人・団体）
支給額：優秀：１０万円、佳作：５万円
採用件数：１～４件
選考方法：論文審査
提出書類：①ジェンダーフォーラム論文賞申込書*　②論文（日本語２万字以内の未発表論文）
備考：執筆にあたってはジェンダーフォーラム『年報』投稿規定に従うこと。

【ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金（A）・（B）の申込書（願書）の利用目的】
標記の申込書（願書）で取得した個人情報は、奨学金採用者（団体）の選考および発表のために利用する。採用者（団体）の論文・報告書等は「年報」に掲載する。また、奨学金制度広報のため冊子、WEB等に採用者名を記載することがある。
以上に同意した上で、申込書（願書）を提出すること。その他、個人情報の取扱いについては、ジェンダーフォーラムのホームページ（http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/gender/）を参照すること。

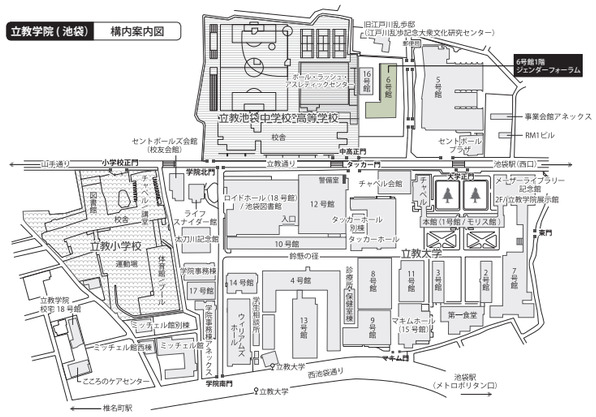
※（B）活動・研究助成金の募集は終了しました。詳細や不明な点はジェンダーフォーラム事務局にお問い合わせください。
ジェンダーフォーラム事務局（池袋キャンパス６号館１階）　Tel：03－3985－2307　E-mail：gender@rikkyo.ac.jp

＊申込書、願書はジェンダーフォーラム事務局、学生部学生厚生課窓口、新座キャンパス事務部学生課、独立研究科事務室窓口にあります。
ホームページ上からもダウンロードできます。（http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/gender/）

立教大学ジェンダーフォーラム

開室日：毎週月曜日～金曜日
開室時間：10：00～16：00
場所：立教大学池袋キャンパス６号館１階
TEL&FAX：03－3985－2307
E-mail：gender@rikkyo.ac.jp
URL：http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/gender/

ジェンダーフォーラムは2013年３月に、ミッチェル館から６号館へ事務室を移転しました。



詳細は、10号館通路のジェンダーフォーラム掲示板またはHPでご覧ください。

Rikkyo Gender Forum
News Letter
Gem

Vol·35
2016.10.1
立教大学ジェンダーフォーラム

Ｇｅｍとは…光輝く宝石。ジェンダーフォーラムの前身である女子学生寮「ミッチェル館」にちなみ、Gender Encountering at Mitchell（ミッチェル館でのジェンダーの出会い）を意味します。

2016年度公開講演会（6月11日（土））

落語を通して考えるジェンダー

講師：古今亭菊千代氏（落語家）

今回の講師は落語家の古今亭菊千代さん。1984年に古今亭圓菊門下に入門。1993年に先輩噺家とともに東京で女性として初の真打に昇進し、落語界におけるガラスの天井を打ち破った。寄席やホール、各落語会への出演のほか、手話をもちいた落語や朝鮮・韓国語での落語に取り組んだり、矯正施設で落語を披露するなど、社会活動にも熱心な噺家である。

良く通る澄んだ声でリズミカルに進む菊千代さんのお話には、思わず引き込まれる。落語は伝統的に、「男が話して男が笑う文化」であったという。700人ほどいると言われる噺家のうち、女性は50人弱。今日でも女弟子を拒む師匠がいないわけではない。外部との接触が少ない芸人の世界である。菊千代さんが修行していた当時は、セクハラが横行していたばかりか、少し油断をすれば性犯罪の被害に遭いかねないほど、女弟子はつねに性的な眼差しを向けられていたそうだ。抗議しても、「洒落じゃないか」と流されるのが落ちであった。年下の女性として、お上さんと良好な関係を結ぶのも、易しいことではなかった。

そんな中、めげずに修行に励み、ついに昇進。陰口も叩かれたし、「女真打」という特別な名で呼ばれもしたが、のちにただの「真打」として知られるようになる。周りの目もさることながら、自分自身にも変化があった。男中心の落語の世界、女の人物を不当に描いた演目も多い。そのため、はじめは「松」を「お松さん」に置き換えるなど、男の人物を女に変えてやっていた。けれども次第に、自分にとって自然かどうかを基準にするようになり、いつしか女というレッテルが気にならなくなっていった。

自分らしさが大事と語る菊千代さんの着物は、「9」の紋付だ。平和でなければ笑ってもらえない、との思いから憲法９条の尊さを訴える「芸人９条の会」を立ち上げた。噺家は昔、社会を風刺する役目を担っていた。にもかかわらず、現代では「お上に盾突くな」というプレッシャーのもと、「落語家らしく」という言葉が政治に関与しない姿勢を意味するようになってしまった。そんな風潮を尻目に平和活動を続けるうちに、女としてではなく、古今亭菊千代として見てもらえるようになったと彼女は実感している。

講演ののち、学生による前座を挟んで落語「権助提灯」を披露していただいた。手話の講座で締めくくってくださり、盛り沢山の２時間であった。出席したのは小学生から60代までの計79名。平和、平等、そして笑いを尊ぶ菊千代さんの人柄に触れることのできる貴重な機会となった。社会を担う一人の市民として、また男性が多数を占める職場における女性プロフェッショナルとして（日本の大学における女性教員の割合は23パーセント程度にとどまっている）、菊千代さんのような先輩の存在は本当に心強い。姐さん！と呼び掛けたい衝動に駆られた参加者は、おそらく、私だけではなかっただろう。

石川 千暁（本学文学部助教）

第68回ジェンダーセッション（2016年5月20日（金））

「世界の紛争下における性暴力の課題」

登壇者：秋林こずえ氏（同志社大学大学院教授 / 婦人国際平和自由連盟（WILPF）会長）
米川正子氏（本学21世紀社会デザイン研究科特任准教授）

今回のジェンダーセッションでは二人の先生方による講演だった。

まずは同志社大学教授の秋林こずえ先生で、先生は婦人国際平和自由連盟（WILPF）にも所属しており、世界政治の面からみた性暴力について、以下の内容を講演してくださった。かつて性暴力は不処罰の対象、すなわち罪として認識されていなかった。しかし旧ユーゴスラビア内戦、ルワンダ内戦で国際的に罪として考えられるようになり、1998年に採択されたローマ規定において戦争犯罪として明文化された。そして2000年10月、女性平和安全保障が国連安保理で採択され、紛争地における性暴力が脚光を浴びるようになった。だが、性暴力とは、紛争地という極限の緊迫した状況下の土地で起こる残虐的なもの、と一言で説明できるようなものではない。軍隊という厳しく管理され、トレーニングを強いる組織体制に内在する問題なのではという見方もある。紛争地だけでなく、他の場所へのフォーカスもしていくべきなのではないだろうか、と最後は問いを提起された。

次に、本学の米川正子先生は、コンゴ民主共和国における性暴力を鉱物資源と関連づけて講演してくださった。コンゴは天然資源に恵まれた土地で、世界中の人々がその資源を手に入れようと躍起になる。軍隊は鉱物を獲得するために、まず資源の多いその土地に住まう女性を、性暴力でもって攻撃する。レイプによって生まれた子どもに母親が愛着を持つことは難しく、結果、集団全体が弱体化していく。これによって軍隊は、大量虐殺や強制移動を伴うことなく、したがって国際批判を受けることなくその土地を支配し、資源を手にすることができるのだ。このような資源は紛争鉱物と呼ばれる。そして、その資源は先進国の企業が買収し、私たちの手元に、たとえばスマートフォンとして届く。つまり、それらの製品を購入する私たちもまた紛争地における性暴力の罪に加担しているのだ。米川先生は、紛争地における性暴力が私たちと無縁ではないということを示された。

両先生の講演内容の共通点はこうだ。女は子孫をつなぐ重要な存在であり、男の守るべきもの。その女を「侵す」ことは相手の所有物を自分のものにしたも同然であり、その集団を支配下に置いたことにつながる。また、一度性暴力を受けた女性は恥さらしと扱われてしまうため、もとのコミュニティへ戻ることは困難となる。こうして集団を意図的に不安定な状態に陥れ、最終的に、弾丸や兵を無駄にすることなく自分たちの領域を広げ、勝利へ向かうことができるのだ。つまり、紛争の武器として性暴力は行われている。また、PKOという国際的な正規の軍隊でさえ、大量レイプを黙認したり、生活のために体を売る女性を買ったりと問題を起こしている。紛争地における性暴力は、加害者の立場から考えると、日本での性暴力と異なり、その目的もやり方もまったくの別物だと考えさせられた。

小玉 明依（本学社会学部1年）

映画上映会（2016年6月3日（金））

ドキュメンタリー映画

『The Man Who Mends Women（女を修理する男）』上映会＆講演会

登壇者：白戸圭一氏（三井物産戦略研究所中東アフリカ室主席研究員）
米川正子氏（本学21世紀社会デザイン研究科特任准教授）

「性暴力は、紛争における戦略の一つとして行われている」。この事実を今の日本でどれくらいの人が知っているのだろうか。

現在、コンゴ民主共和国の東部地域では民族紛争の延長上で、政府軍と反政府軍、地域のゲリラ部隊や国連軍を巻き込んだ紛争が既に20年以上も続いている。この地域に住む多くの市民がこの紛争に巻き込まれ被害に遭っている。鉱山の採掘に駆り出され、性暴力の被害に遭い、虐殺されるという事態が絶え間なく起きているのである。

なぜ、市民がそのような事態に巻き込まれているのだろうか。コンゴの紛争問題を研究している米川先生は、政府軍や反政府軍が地域を制圧し、組織権力の強化のために鉱山支配や性暴力が行われていると指摘する。市民を搾取し、地域の鉱山を支配することで採掘される鉱物資源は、直接的な組織の活動資金になる。それゆえ、服従しない人々は有無を言わせず虐殺されていくのだ。

そして、この映画の主題でもある性暴力はどのように行われているのか。事実は非常に残虐である。性暴力は女性だけでなく男性にも行われ、被害者は0歳から80歳までのほとんどすべての年代に当てはまる。それは性器を銃で撃つ、ナイフで切除する、家族の前でのレイプを行うなど残虐非道極まりないものである。

一般に、「性暴力」という問題は、個人的な問題と捉えられる。性的暴力は個々人の関係の中で起こる事件として扱われることが多いからであろう。しかし、実際にコンゴにおけるその実態は、我々が想像するところとはかけはなれたものだ。性暴力でもって被害者に恐怖と恥を与えることにより、地域からの強制移動を余儀なくさせ、当人が属するコミュニティを弱体化させるという側面を目的としているのだ。

本作品は、自身の命を危険にさらしながらも懸命に性暴力被害者を治療する婦人科医のムクウェゲ氏の姿を映している。彼は治療を続けながら、「性暴力」とは何であるかを世界に訴えている。

通常、私たちは「性暴力」と聞いてなにかいやらしいようなイメージを抱き、その問題さえ忌避するような傾向がある。しかし、今回の上映会を通してまさにその関わろうとしない、関わりたくないという態度こそがこの問題をより助長させているということが、認識されたのではないだろうか。性暴力は、その側面を利用する形で行われているからだ。

また、日本から遠く離れたコンゴで起きている問題だとはいえ、私たち日本人はこの紛争問題に不可避的に関わっている。白戸氏が指摘するように、私たちが使う携帯端末にはコンゴを原産とする鉱物が使用されている。つまり、紛争の資金源となる鉱物資源が使われた製品を買うことで、我々もまた、血塗られた紛争の継続に加担しているのである。

どれだけ、この事実を知っている人が日本にいるのだろうか。無関心は一番罪深いものである。本上映会を通して、少しでも多くの人がコンゴ紛争並びに性暴力の問題に関心を寄せてくれることを願わずにはいられない。

畑中 昂淳（本学文学部3年）

2016年度

ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金B　授与者決定！

ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金は、本学学部および大学院に在籍する学生で、ジェンダーに関わる活動・研究をした者（団体）、あるいは活動・研究を計画している者（団体）を幅広く対象とし、2000年度から募集を始めた奨学金です。2016年度前期に行われた（B）活動・研究助成金には4件の応募があり、2016年5月16日に開催された選考委員会において、1件に助成金を授与することを決定いたしました。また、授与者には、5月27日に開催された授与式にて、和田悠所長より奨学金が授与されました。選考結果は次のとおりです。

ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金（B）選考結果

B 活動・研究助成金

奨学生氏名：加藤　明日菜（文学研究科日本文学学科博士前期課程2年）
研究課題：日本近現代文学における女性同性愛作品の系譜作成
支給額：２００，０００円